

SHOW HEY シネマルーム

★★★

わたしたち

2015年・韓国映画

配給/マジックアワー、マンシーズエンターテインメント・94分

2017 (平成29) 年 10 月 14 日鑑賞

テアトル梅田

Data

監督・脚本：ユン・ガウン

企画：イ・チャンドン

出演：チェ・スイン/ソン・ヘイン

/イ・ソヨン/カン・ミンジ

ユン/チャン・ヘジン

■■■ショートコメント■■■

◆公式ホームページによれば本作の「INTRO」は次のとおりだ。

I N T R O

子供の頃、大好きだった友だちに裏切られて辛い時期があった。

傷つき寂しさ、怒り、悲しみの後にまた仲良くできるように、
何とかして真意を伝えようとしたが、
お互いを傷つけるだけで終わってしまった。

歳を重ねてもあまり変わりはしなかった。
出会いの数ほど様々な関係が気まずく同じ失敗を繰り返した。
そしてほとんどの大人がそうするように、私も努力することをやめた。
だが傷跡や痛みはひどくなった。

私はぶつかって転んで倒れ、傷ついても一歩ずつ踏み出そうとしていた
幼い頃の自分を否定する卑怯な大人になってしまっていた。
誰にも真意を伝えられない優しくない大人に。

この映画は、無気力と自己放棄の陰に隠れる今の私のような大人、
そして傷ついて心痛めながらも勇気を振り絞って前に踏み出した
過去の私のような子供たちへの、慰めと励ましの手紙。

わたしたちは多様で複雑な理由で愛する人を傷つけ、愛する人に傷つけられる。
それでも、わたしたちは本当の気持ちを伝えることを諦めてはならない。
前を向いて生きるためにわたしたちは何度も愛さねばならない。

監督 ユン・ガウン

友だちになれる、何度でも。

“いじめ”という目に見えない悪魔に、少女たちはどう向きあうのか。
名匠イ・チャンドンが認めた若き女性監督が描く
“なかよし”二人の成長の物語。

人生で初めて経験する友情、裏切り、嫉妬、すべての感情に戸惑い葛藤する子どもたちの姿を生き生きと鮮烈に映し出す「わたしたち」。

「オアシス」「シークレット・サンシャイン」の名匠イ・チャンドン監督が見出した新鋭ユン・ガウン監督が自身の経験を元に描いた本作は、誰もが通り過ぎてきた子どもたちの世界を通して、いじめやスクールカースト、家庭環境の格差など、現代が抱える社会問題を盛り込みながら、他者との繋がりの中で生きる「わたしたち」の関係について問いかける。

第66回ベルリン国際映画祭ジェネレーション部門ノミネートを皮切りに数々の国際映画祭に招請され、「世界中の人々が会おうべき傑作(ズリーン国際映画祭)」と国籍世代を問わず多くの絶賛と共感を得ている。日本でも第17回東京フィルメックスの観客賞などトリプル受賞の快挙を成し遂げた。

子どもたちの表情と言葉を追うだけで

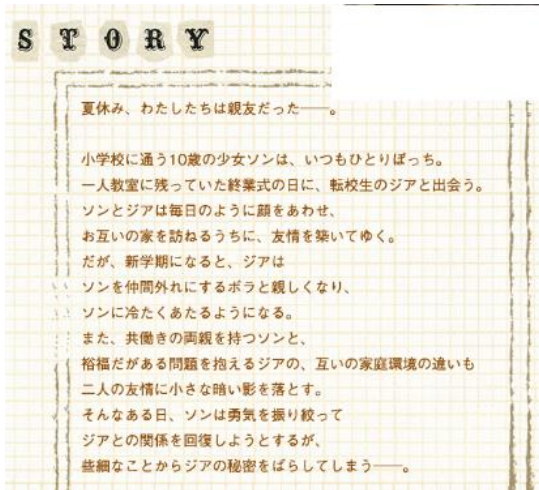
濃密でドラマチックな展開を見せる、比類なき傑作。

「わたしたち」で長編デビューを飾る1982年生まれのユン・ガウン監督は、2011年、「Guest」で父親の浮気相手の家を探し出す女子高生の日を生き生きとしたタッチで作り上げ、クレルモン＝フェラン映画祭グランプリなどその年の短編映画界を席卷。2013年、「Sprout」で7歳の少女の初めてのお買い物冒険譚を描き、第64回ベルリン国際映画祭クリスタル・ベア賞や第31回釜山国際短編映画祭観客賞を受賞し、本作で二作連続ベルリン国際映画祭の公式招待を受けるなど、世界から期待を寄せられる韓国映画界の新鋭。

イ・チャンドン監督が企画者としてシナリオ開発から共に携わり、韓国芸術学校映像院の教え子であるユン監督と「真実の話の中の、本当の瞬間」を求めて絶えず話しあってシナリオを完成させた本作では、ユン監督が常に注目してきた子供たちの世界を独自の視点で捉え続けたその比類なき才能をいかに発揮している。

主人公ふたりの少女を演じたチェ・スンとソル・ヘインは、3か月にわたり実施された100人以上の子役オーディションの中から選ばれた。撮影当時11～12歳で共に映画出演は初めて。ユン監督は、彼女たちの表情をつぶさに捉えるために近距離での撮影を選択し、台本を渡さず場面ごとの状況説明や話し合いを重ねて撮影を行うスタイルで、等身大の繊細な心の揺れまで丁寧に描いている。

◆公式ホームページによれば本作のストーリーは次のとおりだ。



◆公式ホームページの「NOTO」には次のとおり解説されている。

N O T O

監督の自伝的ストーリー、他人との関係を続けて生きている現代人の物語

ユン監督「とても長い間私の心の中にあっただいお話でした。いつまでも謎が解けないミステリーが、人と関係を結ぶこと、のようです。幼いころ好きだった友だちと仲良くなったり、そうでなくなったりする一連の過程や、友だちとの間で経験した気まずさは人間関係について絶えず考えさせられました。大人になった今も度々繰り返されるのは、他人と関係の中で生きてゆく「わたしたち」皆に共通するものだと思いますよになったのです」

3ヶ月間に100人の子役オーディション

100名を超える子役のオーディションは3回に分けて行われた。1次は1:1で30分間の対話をし、2次では合格した彼らをグループ分けしてお芝居ごっこを、3次ではレベラアップしたお芝居を行った。決まった台本を覚える臨むオーディションではなく、ユン監督が先生のように2時間の間にどんなことを考えてのか、どんな性格か、他の子といつとどきだった行動をとるのかを注意深く観察する方式であった。その結果、宝物のようなチェス・サイン、ソル・ヘイン、イ・ソヨン、そしてカン・ミンジュン(弟)を見つけ出した。

台本のない撮影

本作の出演者には台本が与えられなかった。リアルな物語を収めるには明確な指示やセリフは役者を縛ってしまうという憂慮から、ユン監督は、撮影に入る前に役者が自分の役割と背景、撮る内容についての説明をした。繊細な演技が必要だった心の準備が必要な場面では、前日に1ページだけの台本を渡した。このような独特な方法は撮影中にも監督と役者が頻りに語りあうきっかけとなった。ある場面での人の気持ちと行動についてユン監督が質問すると、各自が感じ取った感情と考えを正直に語りあった。ユン監督は、子供たちが使う言葉とそれぞれの性格によって現れる行動とディテールを見逃すことなく実際のシーンにも反映させた。

イ・チャンドン監督とのシナリオ作業「真実とは何であるか？」

ユン監督がシナリオ作業中に一番気を使ったことは「真実とは何か」というもの。師匠であるイ・チャンドン監督はユン監督に方向を示したり、答えを提示する代わりに、「これは真実なのか?何が本物でどんなものが偽物なのか?」といった本質について絶えず質問を投げかけた。この問いは撮影が終わるまで繰り返され、本作の映画作りの目標となった。

特別なリハーサル、3ヶ月間のワークショップにゲームと即興劇、そして心理カウンセラー

ユン監督は出演が決まった役者に、演技クラスをお休みさせて撮影3ヶ月前からリハーサルを開始した。彼らがまだ11、12歳の子供なので、俳優、監督、スタッフたちとも馴れて、各自のキャラクターに没入する時間を与えるためであった。ワークショップの間は、劇中の出来事を伝えて即興劇をさせ、感情表現の濃淡を調節しながらセリフの修正も行った。一方でお互いを傷つける葛藤を演じることが、幼い役者には深い傷やトラウマとなる可能性があることから、心理相談のカウンセラーを呼んで話しあう時間を設けたりもした。

カメラワーク

即興性を要する場面が多く、テイクごとに毎回違った演技になる状況。そして役者の自然な動きを捉えるために、カメラアングルは動線を決めずに2台のカメラで撮影した。役者の感情の流れを描くことのない配置し、役者の即興劇を多角度で捉えることができた。平均10回以上繰り返されるテイク毎のセリフと演技が変わっても、2台のカメラは役者の多様な動きと表情の変化を捉えるのに効果的だった。

◆1982年生まれ的女性監督のユン・ガウンが自ら脚本を書き、監督した本作は、イ・チャンドン監督の企画に基づくもの。イ・チャンドン監督といえ、私が観たものだけでも、『オアシス』(02年)、『シネマルーム7』177頁参照)、『シークレット・サンシャイン(密陽)』(07年)、『シネマルーム19』66頁参照)、『ポエトリー アグネスの詩』(10年)、『シネマルーム28』235頁参照)、『私の少女』(14年)、『シネマルーム36』141頁参照)、『フィッシュマンの涙』(15年)、『シネマルーム39』201頁参照)等を監督あるいは制作しているが、それぞれ素晴らしい映画だった。また、彼は2003年の盧武鉉政権下で文化観光長官に就任したことで有名だ。

そのイ・チャンドン監督が「目をつけた」若手女性監督の才能は、たしかに素晴らしいものがあるのだろう。しかし、いかんせん本作は私にはあまり興味のないテーマ。したがって、2人の少女を中心とした演技の素晴らしさとそのストーリー展開は十分理解できたものの、興味度でイマイチ……。

2017(平成29)年10月16日記